

Collège de France  
*Philologie de la civilisation japonaise*  
2018-2019

*Le Roman du Genji:*  
Poésie, langue et bouddhisme  
10. Le 12 mars 2019

- *L'Auguste Loi* -

- 年ごろ、私の御願にて書かせたてまつりたまひける『法華経』千部、いそぎて供養じたまふ。わが御殿と思す二条院にてぞしたまひける。七僧の法服など、品々賜はす。物の色、縫ひ目よりはじめて、きよらなること、限りなし。おほかた何ごとも、いといかめしきわざどもをせられたり。

- 女の御おきてにてはいたり深く、仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなどを、院はいと限りなしと見たてまつりたまひて

- 三月の十日なれば、花盛りにて、空のけしきなども、うららかにものおもしろく、仏のおはすなる所のありさま、遠からず思ひやられて、ことなり。深き心もなき人さへ、罪を失ひつべし。薪こる讃嘆の声も、そこら集ひたる響き、おどろおどろしきを、うち休みて静まりたるほどだにあはれに思さるるを、まして、このころとなりては、何ごとにつけても、心細くのみ思し知る。

- 惜しからぬ この身ながらも かぎりとして  
薪尽きなむ ことの悲しさ
- *oshikaranu / kono mi nagara mo / kagiri tote /  
tokigi tsukinamu / koto no kanashisa*

- 佛此夜滅度，如薪盡火滅。(p.5a21)
- 入無餘涅槃，如薪盡火滅。(p.9a23)

- (160) 如是相を見るもかなしき 二月や こ  
まかにわけし もち月の影
- *nyozesô wo / miru mo kanashiki / kisaragi ya /  
komaka ni wakeshi / mochizuki no kage*

- 我常住於此，以諸神通力，令顛倒眾生，  
雖近而不見。(p.43b18-19)



- 秋ふかく なりはてにける み山かな 花見  
し枝に 木の実色つく
- *aki fukaku / nari-hatenikeru / mi-yama kana /  
hana mishi eda ni / konomi iro-zuku*
- Fujiwara no Yoshitsune 藤原良経 (1169-1206)

- *takigi-kori / mine no konomi wo / motomete zo  
/ e-gataki nori ha / kiki-hajimekeru*

- 薪こる 思ひは今日を 初めにて この世に  
願ふ 法ぞはるけき
- *takigi koru / omoi ha kyô wo / hajime nite /  
kono yo ni negau / nori zo harukeki*

- *Shin-Kokin-shû* 757
- Henjô僧正遍昭 :
- すえのつゆ もとのしづくや よの中の を  
くれさきだつ ためしなるらん
- *sue no tsuyu / moto no shizuku ya / yo no naka  
no okure-sakidatsu / tameshi naruran*

- 如是本末究竟等：
- 末の露 もとの雫を 一つそと おもひては  
てゝも 袖はぬれけり
- *sue no tsuyu mo / moto no shizuku wo [= ya] /  
hitotsu [zo] to / omoi-idete [-hatete] mo / sode  
ha nurekeri*

- ややもせば消えをあらそふ露の世に後れ  
先だつほど経ずもがな
- *yaya mo seba / kie wo arasou / tsuyu no yo ni /  
okure-sakidatsu / hodo hezu mogana*

- まことに消えゆく露の心地して、限りに見えたまへば、御誦経の使ひども、数も知らず立ち騒ぎたり。

- 秋風に しばしとまらぬ 露の世を 誰れか  
草葉の うへとのみ見む
- *aki-kaze ni / shibashi tomaranu / tsuyu no yo  
wo / tare ka kusaba no / ue to nomi mimu*



- 御もののけと疑ひたまひて、夜一夜さまざまの事をし尽くさせたまへど、かひもなく、明け果つるほどに消え果てたまひぬ。

- この世にはむなしき心地するを、仏の御  
しるし、今はかの冥き途のとぶらひにだ  
に頼み申すべきを、頭おろすべきよしも  
のしたまへ。さるべき僧、誰れかとまり  
たる。

- いにしへの秋の夕べの 恋しきに 今とは  
見えし 明けぐれの夢
- *inishie no / aki no yûbe no / koishiki ni / ima  
ha to mieshi / akegure no yume*

- 鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに来し方行く先も例あらしとおぼゆる悲しさを見つるかな。今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ。ひたみちに行ひにおもむきなむに、障り所あるまじきを、いとかく収めむ方なき心惑ひにては、願はむ道にも入りがたくや。

- いにしへの 秋さへ今の 心地して 濡れに  
し袖に 露ぞおきそふ

- *inishie no / aki sae ima no / kokochi shite /  
nurenishi sode ni / tsuyu zo oki-sou*

- 露けさは 昔今とも おもほえず おほかた  
秋の 夜こそつらけれ
- *tsuyukesa ha / mukashi-ima to mo / omohoezu /  
ôkata aki no / yo koso tsurakere*

- 枯れ果つる野辺を憂しとや亡き人の秋に  
心をとどめざりけむ
- *kare-hatsuru / nobe wo ushi to ya / naki hito  
no / aki ni kokoro wo / todomezarikemu*

- のぼりにし雲居ながらもかへり見よわれ  
あきはてぬ常ならぬ世に
- *noborinishi / kumoi-nagara mo / kaerimiyo /  
ware aki-hatenu / tsune naranu yo ni*



- 無明、行、識、名色、六処、觸、受、愛、取、有、生、老死